

「保健の言葉で詳しくやってもうるという程度に、こういう大変な時期があるんだよ、でもその後、こういういときがあるからねと伝えられたら、ずいぶん楽だと思えます。」

問谷 これの出産についてもそうだと思います。学ぶ場所が全くないというか、不思議なことに誰も産むまで教えてくれません。

性教育とはまた別に、出産の仕組みや年齢によってリスクを伴うことや出産後の子育てはこんなふうに変化する、という知識が、昔は大家族だったので自分のお姉さんとか近所の親戚の出産を見ていれば分かったが、今は分からなくなっています。

私ももうすぐ39歳というときに産んだのですが、仕事もやめて、だいたい何とかなるだろうと思っていたのが、こんなに大変なことが世の中にあつたのかと(笑)、本当に思いました。学校でも教えてもらわないうちは「そんな大変なことがしら？」、はるか昔のことだうらしまつ(笑)。

それを知らないから、子どもを産みたい人はいろいろいるのに、気づくと高齢になって、妊娠する率も低くなるリスクも高まるということはその年齢にも含め一般的に知る機会がないと感じます。

「出産育児が大変なことはすぐに伝わります、もう産むのをやめようか」という話になって来ます。でもその後、例えば2歳前後のそのままだと、おまじいというくらいかわい時期があることはなかなか伝わってきません。

「自分はずっと思っていて、会社の雰囲気、というのがあるのかもしれない。」

問谷 制度だけではなかなか意識が変わっていきません。誰かが率先して、例えば厚生労働省の男性は率先して育児を取得するなど、制度と意識の両方で進んでいく必要があるのではないのでしょうか。

「妊娠で買はず、手をかけた方がいい子になるという理屈は、世に手をかけ過ぎてない話も聞いたりします。」

問谷 母親が専業主婦だったり時間があればそれでいいのですが、どうしても母親の仕事で、無理にというとき、



問谷 誰かが産むときに、脅かさない程度に、こういう大変な時期があるんだよ、でもその後、こういういときがあるからねと伝えられたら、ずいぶん楽だと思えます。」

仕事も含めての女の人の生き方、ワークライフバランスを考える機会をもっと少し作ってほしいです。私もお手伝いができたらなと思います。時々そういうシンポジウムの仕事もやらせてもらっています。

働きながら出産育児できるには制度と意識が変わらなければ

「おまじいという理屈は、世に手をかけ過ぎてない話も聞いたりします。」

問谷 生後2か月くらいから月に1度、保健所主催で母親の集いがありました。そこで同じく1歳の月齢の赤ちゃんを連れてママと話せる。似たようなタイプのママと話せることでだけ助かるとか、その人たちが今でもいいお友達です。

親子で行ける児童館だけではなく、江東区では子ども家庭支援センター「みずく」という施設におもちゃがあつたり本があつたり、疲れた母親のための2時間くらい見守りあつてくれるというサービスもあつたり。

江東区は公園も多くて、商業施設でも最近では赤ちゃん相談センターがあつたり、遊ばせる場所もあつたり。

父親が休みを取って母親と交代ができる状況があれば、お母さんも自分の仕事を減らすに子育てができます。保育園でうまくいっている人は、意外に専業主婦より子どもが多いというデータもあるんです。家に帰ってきた子どもと向き合う時間が少ない分、子育てに対して、重荷になるという気持ち減るみたいで、かえって第二子、第三子の気持ち強いそうです。

健康は親に感謝

「何か健康管理に費やしている」となるとあります。

問谷 私は子育てで丈夫な人です(笑)。



その一方で保育所の待機児童が多いのは問題で、子どもが少ないうちにもそこにならざると思えます。男の人は子どもが何人いようと仕事を全く変えないで済みます。女性もだいたいよくなたとは言え、仕事を中断するとうち思いがあつて、二の足を踏んでいるうちにどんどん結婚も出産も遅くなるという状態があると思えます。産んでも

母が小さいころに病気をさせないようにならざると思えます。親に感謝しなければと思えます。

声を使う職業なので、うがい、手洗いは風邪の季節でなくてもやっています。食生活では、子どもが産まれたのも大きいです。野菜に関してはかなり神経質に必ず青いものとカロチン系のオレンジと黄色のものを摂るようになっています。運動は、私はかなり歩くほうなので子どももずいぶん歩かせてますが、それが基礎的な体力につながるのかなと思えます。子どもの幼稚園も時間ぐら歩いていく遠足があるんですけど、体を動かすことが基本だと思えます。

「おまじいという理屈は、世に手をかけ過ぎてない話も聞いたりします。」

問谷 小学生の親になるんだなという。学校でこれからのいろいろを教わるという段階になつて、私もまた、小学校とか中学校のいろいろのこととが分かってくるかなと思えます。

問谷 小学校とか中学校のいろいろのこととが分かってくるかなと思えます。自分のころと問題にどうなるか、どうなるか、これからの女性の生き方をいろいろ選択肢の中から選べる子になってくれるかしらと、いろいろ考えます。

私が小さい頃、父は、女の子だから、とは言わなかつたんです。「将来、何の仕事をするんだ?」というような会話をいつもしていました。それだ女性も当然、仕事を増やして働いて生きていくのだと思っていたので、娘にもそういう感覚が小さいころからあるんじゃないかと思っています。

でも今は娘に聞く「働きたいか。だって、パパは毎日会社に行つて、帰ってくるの遅いから、大変そうだから嫌

この人素敵な話
Interview

だ」とか言っていて、ちゃんと見ていますね。

親の一言は大きいと、今になって思っています。どうしても核家族で身近に高齢者がいませんから、お年寄りの話を聞く機会が本当はもっと欲しいんです。うちの子は教会の幼稚園で、老人福祉施設が一緒になっているんです。横に保育園も老人ホームもある。そこにいる人とお話をするだけなんです。おしべりボランティアというのをやっているんです。認知症の方もいて、行くたびに自己紹介しなければいけなかったりするのですが、昔のよき時代の思い出だったり、あるいは子育てについて「子どもなんて放っておいたら育つわよ」と言われて教わられたりして、話す機会を持ってよかったなと思います。子どもも一緒にいって、いくな世の中、いろいろな人がいることが分かったりするの、そういう機会も、いろいろなことを話したらなと思います。

「禅問答」のような
イチロー選手のインタビュー

—アウンサーとして、いろいろな方と出会われれば話を聞かれましたか、と聞きますが、その中に印象に残っている話、感動したことはありますか。

関谷 私はスポーツの番組が多かったのですが、イチロー選手が年間200安打

達成のころから大リーグに行くまでずっと取材させてもらったり、長嶋さんが巨人の監督、相撲は若貴の時代で、サウカーはJリーグ誕生のとき、カズがトロフィーでデブが出てきたという時期を取材させてもらったので、ある意味、スポーツのいい時代に関われました。

イチロー選手は、インタビューが禅問答のようでした。質問にどう答えるかを考えて、ひとひねりするんです。ある年「今年の目標は？」と聞くと、普通

通の選手は三冠王取りたいですとか最優秀防御率とか答えるのですが、そうじゃないんです。じつと考え、「空振りをしたんです」と言われました。え、今年目標が「空振りをしたんです」。それは相手をなめて言っているわけではなくて、聞くものすごく深いんです。首位打者を取りたいとか数字はあまり言いたくない。自分の野球を輝かしたいという意味で、投球が手元に来て、「これを打ったらアウトになろうと思ったときに、うまくその軌道を外して空振り一個で終わらせたい」ということだったんです。ワンストライクで済まして次にヒットを打ちたい、そういう空振りができるようにしたいという話だったんです。去年は1つだ



けそれができたんです、何月何日の試合の何打席目の何球目なんですと言われて、あとでVTRを見るとき確かに空振りをしていました。それがまだ22、23歳のときですから、並の選手とは違いましたね。

インタビューするにも覚悟が要りましたけど、おもしろいインタビューがとれました。

知っていたんだけど、お手伝いができたら、おもしろいかな、とか、何か発見などありました。

関谷 ワークライフバランスの仕事をやらせていただき、自分のことも願

て、男性もそうなのだと思うんですけど、男性も特に女性には、ワークライフバランスを考えた機会がないままに仕事一筋になっちゃってしまったり、あるいは逆に子育て一筋になっちゃってしまったり、もういい年齢になっちゃってしまったりする。健康と仕事と子育て、それが複雑に絡み合っていて、そういうものを考えていくお手伝いができればと思います。

が、大腸がんが始まって、今度新聞紙上で、乳がんについての座談会をやらせていただきます。懇談会で知るごとの大切さを身にしみて感じているので、知っていたらお手伝いができたらと思います。

(2009.1.30収録)